

No.49  
2026.3

## 優れた苗木の利用が広がっていくために

林木育種センター所長 嶋田 理

国内の人工林が本格的な利用期を迎える中、資源の循環利用を進めるとともに、再生林により成長の旺盛な若い森林を確実に造成していくことが重要となっています。また、花粉症発生源対策においては、スギ人工林の伐採後、花粉の少ない苗木や他樹種による植替え等を推進することとされています。

このような中、森林・林業の現場では、植栽する苗木の素性や性能・品質に対する関心や期待が高まっています。特に、成長が良く花粉も少ないなどの遺伝的な形質をもつ特定母樹から生産された特定苗木については、再生林・育林の省力化や低コスト化、さらには二酸化炭素吸収量の向上等も期待され、各地で植栽が広がっているところで

す。林木育種センターでは、長年にわたり、全国で優れた遺伝的形質をもつ林木の品種・系統を開発してきました。令和3年度からの5年間の実績は、共同研究等によるものを含めて、花粉症対策品種やマツノザイセンチュウ抵抗性品種などの優良品種161品種、エリートツリー252系統です。エリートツリー等から特定母樹として指定を受けたものは、令和6年度末現在の累計で466系統にのぼっています。

なお、令和7年度のトピックの一つとして、高成長と少花粉の特徴をより高い水準であわせもつスギ品種の開発が関東育種基本区で大きく進んだことが挙げられます。

また、都道府県等が採種穂園を造成・改良するため、開発品種・系統の原種配布を行っており、近年は、その8割を特定母樹が占めるようになっています。

さらに、品種・系統の特徴をとりまとめた特性表の作成・公表、都道府県等に対する採種穂園の造成・管理等のための技術的なサポート、都道府県や国有林、森林整備センターなどと連携した展示林の設定も進めているところです。

ところで、林木の育種では、多くの交配家系の中から望ましい形質を有する系統を見極め、選抜し、原種配布に至るまで、ひじょうに多くの労力と長い期間を要することが課題の一つです。

このような課題に対し、スギ等のゲノム情報の整備・活用やリモートセンシングによる効率的な評価技術の開発など、育種の高度化・高速化を実現するための研究開発に精力的に取り組んでいるほか、育種の基盤となる遺伝資源の整備・充実、バイオテクノロジー活用に向けた研究開発、原種苗木生産施設の整備等も進んでいます。これらの取組から得られる成果を実装に移しながら、次の世代の品種・系統の開発や普及を加速していきたいと考えています。

林木育種センターでは、今後とも、森林・林業の発展につながり、社会ニーズにも応える優良種苗の普及を図って参りますので、関係者各位のご理解とご協力をお願い申し上げます。

### 【紙面紹介】

遺伝資源の形質評価の取り組み:

- スギの材質と成長の関係について……………2
- 令和7年度に開発した優良品種……………3～4
- 公開シンポジウム「植物バイオテク技術が切り拓く林木育種の高度化と効率化」を開催……………5

- 令和7年度関東地区特定母樹等普及促進会議……………6
- 令和7年度林業研究・技術開発推進関東・中部ブロック会議育種分科会を開催……………7
- 林木育種センタープロモーション動画の紹介……………8



国立研究開発法人 森林研究・整備機構  
森林総合研究所林木育種センター

Forest Tree Breeding Center, Forestry and Forest Products Research Institute